

---

# 『DIABOLOS』 ~ Wheel of Fortune ~

神威

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『DIABOLOS』(Wheel of Fortune)

### 【Nコード】

N4918D

### 【作者名】

神威

### 【あらすじ】

前世、輪廻、転生。真実味に欠ける単語達。不意に現れる曖昧に包まれた映像、襲われる言葉に出来ない不安。思い出す事さえ忘れてしまった記憶。現在と過去。そして、未来。それらが交じり合う時。壮絶な戦いが幕を開ける。戦いの果てに在るモノ。それは戦いの駒となった普通とは全く違う日常を送る者達の想像を遥かに超えるモノだった。

## 『Hermit』（前書き）

『DIABOLOS』を読み返してみても…

おかしな所が多過ぎて書き直す事にしました（；、）

更新は遅いですが…

ぜひ読んで下さい！

## 『Hermit』

もし、生まれ変われるとしたら…

貴方は、どんな自分になりたいですか？

もし、今の貴方の進む道が<sup>あらかじめ</sup>『誰か』に造られたモノだったとしたら…

貴方は、どうしますか？

逆らいますか？

それとも、受け入れますか？

もし、貴方の『最も愛する人』が本当は『最も憎むべき者』だったとしたら…

貴方は、それでもその人を愛し続けますか？

それとも、憎みますか？

いや…憎む事が出来ますか？

この世界に生まれゆく命。

そして、死にゆく命。

それは、途切れる事なく繋がるメビウスの輪<sup>リング</sup>と同じ。

例え、前世の記憶がなくとも魂は新たな躰へと受け継がれ新たな刻<sup>とき</sup>を紡いでいく。

そうして、地球<sup>ほし</sup>は『輪廻』という名の流れを作り上げる。

『輪廻』の中に存在する、人々の記憶の産物として生まれた『歴史』という物語。

その『歴史』の中で決して語り継がれる事のない物語があったとし

ても。

そこに生きた者達の魂もまた確かに存在し、確実に受け継がれていく。

現代いまという刻の中に…

そして…

止まっていた運命の歯車が再び廻り始め、新たな物語の始まりの鐘が鳴る。

我ら語り部は干渉を許されぬ者。

ただ静かに見守るしかないのだろう。  
ならば、この眼に焼き付けよう。

形は違えとて『唯一』の大切なモノを守る為。

己の全てを懸け、戦う者達の生き様を…  
その流れた血と涙の軌跡を…

紅い満月が漆黒の闇を照らしている。  
多くの生命いのちが安らかな眠りに漂う夜。

『ソレ』は永き眠りの淵から眼を覚ます。  
静かな狂気を宿し、静かな闇を浮遊する。  
解き放たれた事への歓喜を抱き…  
愛する『唯一』の者の元へ。

二度と消せぬ愛の証を刻み込む為に…

紅い満月の光を全身に浴びながら『ソレ』は更に浮遊する。

語り部は静かに見守る。

これから始まる悲劇に憂いの表情を浮かべながら…

## 『Olympos』

（オリンポス）

こことは異なる次元の神々の住まう世界。

全ての存在の中心、万物の故郷。

現代はもう、失われてしまった楽園<sup>いま</sup>：

その世界の遥か遠き古<sup>いにしえ</sup>。

豊かな緑の雄大な大地。

東方には壮大な山脈が幾重にも広がっていた。

空中の浮遊岩から迸<sup>はな</sup>る透き通った水の流れ。

地に落ちた水は河を造り、やがては大きな湖と成していく。

果てしなく広がる青の空。

何匹もの鳥達が大きな翼を広げ、優雅に舞い飛んでいた。

見る物や触れる物。

それらは様々な色や音に彩られ、美しい旋律を奏でる。

そこに住む人々は当たり前前に自然を壊す事なく共存していた。

この世界に在る全てのモノは神に与えられ、オリンポスの王が守ってくれている大切な贈り物なのだ。

だから、それらを取り囲む全ての世界をより良き方向に調和しようと常日頃から心掛けている。

もちろん、争いなど存在しない。

誰かと、何かと、戦う。

その概念自体がない。

皆が家族であり、友人であり、愛する人である。

人々の顔には笑みが溢れ、穏やかでゆっくりとした刻が刻まれている。

### 『至高の楽園』

まさにその言葉が相應しい、誰もが一度は憧れるであろう世界。

オリンポスの人々はこの楽園が永遠に続くと思っていて疑わなかった。

いや…

『始まりがあれば、必ず終わりがある。

永遠など存在しない』

それ自体を考える事さえなく日々を生きていた。

光の裏側に確かに在る影が少しずつ、でも確実に侵食し始めている事に気付かず…

オリンポスの中心に浮かぶ、白き光を放つ象牙の宮殿。

この世界の女王、ガイアの住む王宮。

四方はガイアを守る為、薄い水色の結界で被われている。

そのせいで一目には水色の大きな球体が浮かんでいる様に見えた。

広大な王宮内には常に光が溢れていた。

何層にも重ねられた建物は鮮やかで壮麗な彫刻が施されている。

あちらこちらに緑豊かな庭園や透明な幾筋もの滝の数々。

包まれる空気はとても優しく、見ている者やそこに居る者を穏やかな気持ちにさせる慈愛に満ちていた。

王宮の最上階の奥、めいそう瞑想の間。



ガイアの自室の一つである広い部屋は、溢れる光と透明な水が装飾の中心を担<sup>にな</sup>っていた。

部屋のあちこちで噴水の様に水が噴き上げている。噴き上がった水は再び床に落ち、部屋全体に幾何学的な模様を描いていた。

この部屋を真上から見ると事が出来たなら、その水の流れが曼陀羅<sup>まんだら</sup>を描いている事に気付いたであろう。

曼陀羅の中心は一段高くなり、王の立つ蓮華座<sup>れんげざ</sup>があった。

ガイア。

彼女はとても美しかった。

人が彼女を見て真っ先に感じる事は、慈愛。そして母性。

彼女は全ての世界、ありとあらゆる存在の、母であった。

床に届く程の長い金の髪と金の瞳。

白く透き通った肌と同じ、白く長い絹の神衣<sup>しんい</sup>を全身に纏<sup>まと</sup>っている。

華麗な細工を施し、中央には碧く輝く宝石があしらわれた白金の首飾りを着けていた。

それはオリポスの王である証。

蓮華座に立つガイアは憂いの表情を浮かべながら首飾りに触れた。

曼陀羅の外側に控える側近達もまた憂いを滲<sup>にじ</sup>ませて顔を伏せている。深遠なる宇宙の深さを感じさせる瞳は、目前に控える二人を見つめていた。

一人は白銀の髪に蒼い瞳の男。

端正な甘いマスク。

長い手足に引き締まった体躯。

優しい印象の青年はオリポス唯一の軍を率いる、チャリオット「戦士」ソリドール。

もう一人は黒の髪に紫の瞳、額に紅きチャクラを持つ女。  
ガイアと同じ白い肌と細い躰。  
涼しげな瞳。

唇には薄く紅を差していた。

オリンポス史上最高と謳<sup>うた</sup>われる、メーガス「魔術師」レア。  
二人とも白い革の軍服に似た上下に長いマントを羽織っている。  
長い髪はそれぞれ彫刻を施した揃いの髪飾りで後ろに束ねていた。

「やはり、避ける事は出来ないのですね…」

ガイアが静かに口を開く。

声には深い悲しみが含まれていた。

レアは顔を上げると真っ直ぐに彼女を見る。

「ハデスの異動宮は日毎に力を増し、オリンポスに接近しています。  
結界を破り、こちらに侵入してくるのは時間の問題です」

その答えにガイアの口から重い溜息が漏れた。

オリンポスに敵対する破壊の民達の王、ハデス。

彼は元々オリンポスの神の一人であつたが、破壊と混沌を愛し調和  
と秩序を憎んでいた。

戦いをもたらすであろう、その思考に危険を感じた最高神達は彼を  
異空間に封じ込めた。

オリンポスでは殺生は基本的に禁じられている。

その為、ハデスは殺さずに永久に追放する事にしたのだ。  
まだ幼かつた彼を殺すには理由が足りず、何よりも彼に対しての最  
高神達の慈悲があつたからだ。

だが、ハデスはその慈悲を理解する事は出来なかつた。  
なぜなら彼の心には慈悲という物自体が存在しない。

あるのは全てに対する強い憎悪、破壊への欲求、殺す事で得られる  
甘い快樂。

ハデスは閉じ込められた異動宮の中で力を蓄え、同じように破壊と混沌を愛する者達を集めていた。

オリンポスをこの手で滅ぼす。

それだけを望んで…

「彼らには話し合い等は存在しません。

ただ破壊と殺戮の限りを尽くすのみ。

もはや戦いは避けられぬかと…」

言い終えてレアは唇を噛んだ。

「ソリドール。

その場合、我が軍に応戦するだけの力がありますか？」

彼もまたガイアを真つ直ぐに見つめた。

「我々は秩序を守るという名目で造られた形だけの軍かもしれないん。

それでも軍に属する者達はいずれも劣らぬ強き者達ばかり。

彼らに対抗する力は十分に保有しています」

「しかし…」

彼らに勝てる程の力はない…」

ガイアは憂いの表情を濃くして呟いた。

瞑想の間を重苦しい沈黙が支配していく。

「我らは争いを好まぬ民。

だからこそ、戦いを経験した事がない。

戦う事だけが生きる道としてきた彼らに打ち勝つ可能性は低い…」

絶望を言葉にしたガイアにソリドールが堪らず立ち上がった。

「ガイア様。

それでも、私達は負ける訳にはいかないのです。

初めから諦める訳にはいかないのです。

このオリンポスと民達を守る為にも」

ソリドールの強い口調につられ、レアも立ち上がる。

「守る為に。」

勝つ為だけに。

我らは己の出来うる限りを尽くします」

二人の決意に満ちた言葉と眼差しを受け止め、ガイアは静かに頷いた。

「私がこの様に弱気ではいけませんね…」

民達が不安に襲われる事になる。

戦いがもはや避けられぬ宿命さだめならば受け入れましょう。

負ける為ではなく、勝つ為に」

その場に居た全員が強く頷く。

「では、直ちに準備に取り掛かって下さい。

しかし、まだ民達には悟られぬ様に。

不安は混乱を招きます。

良いですね？」

ガイアは曼陀羅の外側にいる側近達に命じる。

「御意」

声を揃えて返事をする、慌しく次々に瞑想の間を後にする側近達。その姿をガイアは黙って見守っていた。

「ソリドル、レア。」

来たるべく戦いにあなた方の力は絶対に必要です。

だからこそ、今は十分に休養を取って下さい」

側近達を見送った後、ガイアは二人に向き直り優しい笑みを湛たたえる。

「有り難きお言葉。」

それでは私達も失礼致します」

深く礼するとソリドルは背を向け扉に向かう。

だが、レアはじつとガイアを見つめたままで立っている。

「レア、どうかしましたか？」

動こうとしないレアにガイアが問い掛けた。

「ガイア様…」

「何ですか？」

笑みを湛えたままのガイアにレアは口を噤んでしまっ

「レア？」

「どうしたのだ？」

引き返して来たソリドールがレアの行動を不思議そうに見ている。

「いえ…」

「何でもありません。」

「失礼します」

レアは深く頭を下げると足早に扉に向かった。

再び軽く会釈をするとソリドールが慌てて後を追って行く。

扉が閉まる瞬間、レアは蓮華座を振り返った。

そこには深い哀しみに囚われた王がただ立ちすくんで居た。

一人残されたガイアは、吹き抜けの向こうに広がる外の庭園に視線を移した。

滝が光を反射してキラキラと輝いている。

美しい光景を見ていても、心は少しも癒されない。

いや。

目の前が美しい程、心は薄暗い闇に支配されていく。

おそらく、勘の鋭いレアはこの闇に気付いたのだろう…

隠そうと必死になっても、闇は拭えない。

「全ては私が犯した過去の過ちの結果…」

「そのせいで…」

「多くの血が流れる…」

「罪を背負い、罰を受けるべきは私一人なのに…」

光から逸らした瞳はこれから起こる戦いを静かに見つめていた。

## 『Prologue・Crimson moon』

（female Y）

舞い上がる砂埃。<sup>すなほこり</sup>

高らかに鳴り響く金属音。

雨の様に降り注ぐ無数の弓矢。

四方から聞こえる咆哮。<sup>ほうごう</sup>

泣き叫ぶ声、祈りの言葉。

私は少し高い丘から眼下に広がる戦いを見つめていた。

人の姿をしている者達。

そして、異形の姿をしている者達。

両者が互いの命を奪い合っている。

一方は戦いを憎んで。

もう一方は戦いを楽しんで。

一方は愛と正義を信じて。

もう一方は凶悪で冷酷無比。

一方は調和の為に。

もう一方は破壊の為に。

壮絶な戦いだった。

どう見ても異形の者達の方が優位にある。

全身に黒のローブを纏い、<sup>まと</sup>顔には無表情の白い仮面。

無常に振り下ろされる剣や斧。

その餌食となり、ただの肉塊に変わり果てた人の姿をした者達。

異形の者達は死ぬ事を少しも恐れてはいなかった。

自らが死ぬ事さえも楽しんでいる様に見える。

【ここは？地獄？】

私は目前の惨劇に耐え切れず眼を逸らす。

すると、視界の先にまだ幼さの残る少年の姿が写った。

【ここに居ては危ない！】

私は急いで少年の方へ駆け寄る。

すぐ前に居る少年を抱き寄せようと手を伸ばした。

しかし…

伸ばした手は虚しく宙を切る。

【？】

もう一度、手を伸ばす。

【何故？】

結果は、同じ。

少年は泣いていた。

祈りの言葉を何度も繰り返しながら。

眼下の戦いを泣きながら必死に見つめている。

まるで、私の姿など全く見えていないかの様に。

【私が見えないの？】

尋ねてみるが答えは返ってこない。

姿が見えないだけでなく、声も聞こえていない様だ。

【！！】

突然、少年が戦場に向かって走り出していく。

咄嗟に後を追う。

止めようと何度も手を伸ばすが捕まえる事が出来ない。

【ダメ！行かないで！！】

叫んでも止まってはくれない。

戦場に辿り着いてしまった少年は落ちていた剣を無造作に掴むと、背を向けている敵に斬り掛かっていく。

【！！】

気配に気付いた白の仮面がゆつくりと振り向いた。

向かい合い恐怖に身動きできなくなった少年を異形の者が見下ろす。仮面越したが、それでも分かる。

明確な、凶気。

他者を殺す事への、快感。

酔いしれる、甘美。

迷わず振り下ろされた剣は少年の左肩を切り裂いていく。溢れ出す深紅の血液。

【やめて!!】

私の声を見捨てて二撃目が下ろされる。

異形の者の剣が少年の頭蓋を捕らえた。

耳を塞ぎ<sup>ふさ</sup>たくなる様な砕ける骨の音。

無惨にも原型を留めていられなくなった体が乾いた地面に崩れ落ちた。

足元に広がっていく、濃い紅の波紋。

裸足の足に触れる、生暖かい感触。

異形の者は満足そうなオーラを浮かべ、少年の成れの果てを見下ろす。

【許せない!!】

不意に私の中に込み上げてくる、憤怒。

憎悪。

殺意。

少年の手から離れてしまった剣を両手で握り締める。

【許さない!!】

強く力を込め、思い切り剣を振り下ろす。

しかし、見事に剣で受け止められてしまう。

それでも私は負けじと剣を振り回し斬り掛かる。



飛び散る火花。

ぶつかる度に鈍い衝撃が腕から全身に伝わっていく。

【何故だ！？まだ子供だったのに！何故…】

「何故、殺したのか？」

異形の者が初めて口を開いた。

【…！？】

「私の声が聞こえているのか？」

私の代わりに、私の疑問を声にする。

驚愕に体躯の動きを奪われる。

「私には見えている。」

お前の姿が。

聞こえている。

お前の声が。

そして…」

少年の死を前に冷静さを失っていた私の思考が一斉に回り始める。

「触れる事も、出来る…」

立ち尽くす私の頬に触れた冷たい掌の感触。

【ど…う…し…て…？】  
混乱。

「何故なら…」

異形の者がゆっくりとした動作で仮面を外す。  
まるでスロー再生の様に。

【…！！】

外された仮面の下に現れた顔…

「私は、お前だからだ…」

口元には残虐に歪んだ笑み。  
濁った暗い瞳。

それは紛れもなく、私の、顔<sup>まぎ</sup>だった…

声に出来ない叫び声を発しながらベッドから飛び起きる。  
全身を伝う冷たい汗。

激痛に上がらない頭を手で支える。

ベッド脇のサイドテーブルに置かれた時計に目をやる。

時刻は午前3：00

「またか…」

重い体を無理矢理に起こし、室内にある小型の冷蔵庫に向かう。

ミネラルウォーターを取り出すと一気に流し込んだ。

喉を通る水の冷たさに少しずつ体と頭が冴えていく。

物心付いた頃から繰り返し見る、夢。

戦争の夢だとは分かるが、そこにある真意は分からない。

ただただ気味の悪い、夢。

見る度に激しい頭痛と深い絶望感に襲われる。

『夢など見ずに眠りたい…』

普段から様々な夢を見る。

しかし、どれも不快な夢ばかり。

お陰で私はあまり熟睡出来ず、常に睡眠不足の状態だった。

知人の医者に睡眠薬を処方してもらい服用していた時期もあったが、  
効果は全く得られず薬に頼むのも諦めてしまった。

「逃<sup>のが</sup>れられない夢ってやつか…」

不意に出てしまった独り言に苦笑しながら閉じられたカーテンを開ける。

窓の外には全てを飲み込んでいく様な漆黒の闇が広がっていた。

じっと見つめていると、あの白い仮面が今にも目の前に現れそうな感覚に囚われる。

再び乱暴にカーテンを閉め、私はシャワーを浴びる為に寝室を後にした。

静寂に包まれる寝室。

微かに開いていたカーテンの隙間から紅い満月が妖しげに輝いていた。

＼ m a l e   S ＼

僕は唄う。

貴女への愛を込めて。

僕は、唄う。

狂おしい程の。

貴女への愛を込めて。

手を伸ばせば届く場所に居る筈なのに。

どんなに手を伸ばそうとも、貴女には届かない。

ありったけの想いを託して。

今日も僕は声に出来ない貴女への愛を唄う。

ただ、貴女の為だけに…

午前3：00

防音設備が完璧に整えられたプライベートルーム。  
中央に置かれた白いグランドピアノに向かい、男は鍵盤を無心に弾いていた。

流れるメロディーはどこか儚気<sup>はかな</sup>で静かなバラード。  
男自身の作曲で、あえて歌詞は付けられていない。  
数年前。

初めて披露した時、あの人はこの曲が好きだと言ってくれた。  
歌詞は必要ないと言っていた。

あの人の為だけに作られた曲。  
あの人だけを想って作った曲。

だから男はその言葉のまま、歌詞を付けずにいた。  
どちらにせよ、歌詞を付ければ内容は一つの想い一色になってしま  
う。

そうなれば、あの人は二度とこの曲が好きだとは言ってくれないだ  
ろう。

それが分かっているからこそ、未だにメロディーだけのままとなっ  
ている。

男はふと鍵盤から顔を上げた。

ピアノに寄り添い男をじっと見つめる女性。  
白い肌に長い黒髪、黒い大きな瞳。

女性は穏やかで優しい笑みを浮かべている。

僕がピアノを弾く時、貴女はいつも傍に佇み<sup>たたず</sup>微笑んでくれる。

貴女はゆつくりとこちらに手を差し出す。

僕は鍵盤に置いた手を貴女に向かって伸ばした。  
だが、僕の指は虚しく宙を掠<sup>かす</sup>める。

いつもと同じ。

いつもと同じ、幻。

現実の貴女は決して僕に優しく微笑んではくれない。  
手を差し伸べてもくれない。  
痛いほど理解している筈なのに。

僕は眠れない。

いつその事、現実から眼を背けてしまえたら…  
だから、ずっと眠っていたい。

だけど…

幻よりも現実で微笑む貴女を見たい。

憎悪、愛情。

絶望、希望。

入り交じる様々な感情と葛藤しながら。

僕は結局、今夜もピアノに向かってている。

眠れない永い夜が明けるのを心から待ちわびて…

厚いガラスの窓越しには紅い満月が妖しげに輝いていた。

｝ male x x ｝

「もうすぐ…」

もうすぐだ…」

静寂。

真つ暗な世界の一角に切り取られた小さな空間。

教会にある様なステンドグラスの塀で囲まれている。

あまりに高く聳え立つ塀は頂上を見る事が出来ない。

出入り出来そうな扉は何処にも見当たらなかった。

空間の中は薄暗い。

四隅には燭台が置かれ、立てられた蠟燭ろうそくの炎が陽炎の如く揺らめいている。

中央には大きな銅製の器があり、水がいつぱいに張られていた。まるで水鏡の様に。

その隣には椅子。

いかにも中世ヨーロッパの貴族が好んだだろう豪華な装飾じゅうしゃが施され、座り心地もかなり良さそうだ。

男が一人。

その椅子に座り、肘掛にもたれながら水面みなもを見つめていた。

「早く…早く…」

呟きながら長い足を組み直す。

「待ち遠しくて仕方ないよ…」

蠟燭の灯りに照らされた横顔は楽しそうに優しく微笑んでいた。

「君は…」

どの私を覚えてくれているんだろうね…？」

優しい微笑が意味深な笑みに変わる。

「それとも…」

表情が一瞬の内に哀しみで彩られた。

「やはり…」

全てを忘れている…？」

男の澱<sup>よど</sup>みのない低い声が静かな空間に響く。

「忘れたフリをしているだけ…」

水鏡の水面に触れる。

広がる波紋。

刺す様な痛みを伴う冷たさ。

それでも男はその痛みさえも愛しそうに水面を揺らす。

「今度こそ…」

失敗はしない…

邪魔もさせない…」

次第に邪気を帯びる声、表情。

「必ず…」

手に入れる…」

空間内に突如、発生した一陣の風に蝋燭の炎が激しく揺れた。

「お前の全てを…  
この手に…」

風は力を増し、ステンドグラスを震わせ、水鏡の水を高く舞い上がらせる。

男は水飛沫<sup>みずしぶき</sup>を気にもせず、腕を組み目を閉じた。

再び空間全体が静寂に包まれる。

まだ波紋の余韻を残した水面には紅い満月が妖しげに輝いていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4918d/>

---

『DIABOLOS』～Wheel of Fortune～

2010年10月28日07時49分発行